エッセイ

遠藤周作「影に対して」を読む

奥野忠昭

この六月に皆で読みあった没後発見作品・遠藤周作「影に対して」の読みをここで再び取り上げようと思ったのは、あの作品は「小説を書こう」としている皆にも普遍的な問題を提示していて、私もたいへん興味深く読んだのだが、自分の読みを十分発表できなかったし、あの時点で、私の読みも浅かった。それで、この場を借りてもう少し詳しく作品を検討してみたいと思ったからである。

漱石は作品について書く文章には三種類あると言っている。一つは鑑賞文で、二つめは鑑賞的批評文で、三つめは批評文である。漱石自身はそのうち二番めの「鑑賞的批評文」を書くと言っている。「鑑賞的批評文」とは気にいった作品をなぜ気にいったのかを考えるために知的に検討してみる文章のことだ。

私もそういう態度で批評したいと思うのだが、私は長年教師をしていて、文学作品を教えるのに作品考察をしなければならないのだが、それには「分析批評」や「構造批評」や「解釈批評」などが一番適していた。それで、どうもそれが自分の批評態度として身についてしまったようで、この作品もそういう観点から精読に臨み、批評文を書くことになった。

さらに私は「回想型」の小説を読んだ場合、どうして「今」主人公がそれを回想するのか、その必然性を問うことにしている。それをしっかりと書き込んでいる小説もあるが、

そうでない小説も多い。例えば志賀直哉の「城の崎にて」など、電車にはねられ「死にかけた経験」をして、その養生のために城崎温泉に来ていると冒頭で書いてあるので、当時死について考えることに必然性がある。しかし、これを書いているのは、三年後で「三年出なければあとは大丈夫」と医者に言われた時である。ようやく「死」から解放された時、ほっとして、あのせっぱつまった時の死生観を書いておきたいと思ったのだろうか、それともあの時が一番はっきりと自分の死生観が露出したと考え、それを今再追求しようとしているのだろうか。これらは私の推測に過ぎないが、そう考えるならば、この回想は主人公の死生観の追求であり、それが「城の崎にて」を書こうとした主人公の志向性（志向性とは人や物事が向かう方向のこと）であろうと推察できる。

このように「主人公が、なぜ今その過去を回想するのか」が、作品の「核」となる「表現課題」を、言葉を変えれば、作品の背骨となる「主人公の対象」を、あるいは「主人公の志向性」を、さらには「核となる筋」を示すものとなる。

故に私はそれが回想型小説理解の要だと思っている。しかしそれは最後まで読まないとわからない場合が多い。だが、いい小説は深く読み進めればそれがはっきりとする。私の回想型小説評価のポイントの一つをそこに置いている。

さて、遠藤周作「影に対して」は「今」（今は瞬間的な現在のことを言い、現在とは今から今と連続している過去のある時点までを指す。ただしある時点は恣意的である）のことがかなり書かれていて、純粋な回想型の小説とは言い難いが、「母のことを中心とした過去」が圧倒的に多く、且つ、過去が今を照らすという形で、過去が極めて重要な役割を果たしている。したがって回想型の変種と考えてもいいのではないかと思っている。（こ

れに似た、最も極端な例は芥川龍之介の「トロッコ」であろう）。

なお、「今」の様子が書かれていなくて、「今なぜそれを……」がとらえにくい回想型小説の多いなか、この小説は「今」の様子がはっきり書き込まれていて、前述の問題がとらえやすい。そこで、まず「今」の様子を探って見よう。

冒頭は今での出来事から始まる。主人公は実家に妻と子供を連れて里帰りしていて、部屋で古い写真帳を見ている。その写真帳の所々で、写真が剥がされていて、それは母が写されているものである。それに義母などという言葉が盛んに出てくることから、父は再婚していて、母が死別か、離婚していると推察できる、父が義母を気遣って「モト妻」の写真を剥ぎとったのだろう。これを契機として、母のことを思い出していくのだが、冒頭のこのシーンは今の導入部であり、同時に過去の導入部でもある。今は、父が孫の手を持ち、庭の池の鯉を眺めている。妻と義母とが何か話し合っている。まずは安定した日常的家族を提示している。問題があると言えば、ここに母がいないことであり、一見すれば、一家を構えた主人公にとっては、さほど現実問題はなさそうに見える。

このように、冒頭を読む限りではわからないが、後を読めば読むほど「今および現在」と過去とが密接に繋がっていることがわかり、なるほど導入部としてもふさわしい入り方だと思えてくる。しかし「核となる志向性」がはっきりしない。志向性としては過去の母を思い出すというのは感じられ、それに主人公も「母はなぜ、父と別れたのだろうか。もちろん今の彼にはその理由が想像できる。だが、それだって推測の域を出ていないだろう。

――中略――彼には父にたいする軽蔑感とともに、母が去っていった理由を具体的にできるだけ突きつめたかったのである」とも述べている。ここに彼の「一応の志向性」が述べ

られている。さすがプロである。読者に読みの方向性を取りあえず与えているのである。しかし、どうしてそれが今なのかが不明である。それこそがこの「一応の志向性」を包む「真の志向性」である。そのためにもまずは主人公の今を探ってみよう。

シーン2は（シーンの番号は筆者が付けたもので、本文で一行あきで示されているところに番号を付けた。以後番号のみを記す）。冒頭と同じ実家の庭や部屋での出来事が書かれている。ここでの事件と言えば父から彼が書いた原稿の出版を出版社に頼んでくれないかと依頼されたことぐらいである。また、主人公は探偵小説の翻訳家であることが示される。

4では自宅から翻訳の原稿を持って出版社に出かけようとするところで、靴底の減り具合から、妻から履き物がそういう減り方をする人は「臆病な意志の弱い性格なんですって」と言われ、ずっしりとこたえる。さらに、彼は小説家をめざしていて、新人賞に応募しているが、まだ、認められていない。結婚以前には大きな口をたたいていたのだが、選評者に認めてもらえないことがつづき、「小説家となろう願いもいつかは諦めに変っていった」とある。（傍線は筆者が記す。○○は主人公のことで、○○は父のことで重要なところ。以下同じ）

また、出版社に出向いた帰りに、同人誌の集まりに行くのだが、その帰りに若い会員から「毎月、何か書いていないと。それから、文学をやるって、結局、強情じゃなきゃ駄目ですね」と言われ「まだ結婚していない頃、自分もこのFのように気負った気持を持っていたな」とぼんやりと思い、「その気負った気持は今の彼の心の何処からも失せて、白い埃が、結婚生活以来、少しずつ溜っている」とある。つまり小説を書くという「芸術」的

意欲が萎え、一家を支えるという「生活」的姿勢になっている。

6では、父が「渋谷まで買物に来たから、一寸、寄ったんだがね」と言って主人公の家を訪れてくる。妻が五才の息子の絵を見せると「この子には芸術的な才能があるかもしれんぞ。あるならばうんと伸してやるのがお前たちの義務だな」などと言う。これを聞いた主人公が過去に、自分に向かって言った父の「大体芸術などというもんは、まともな人間なら手をつけぬもんだ」を思い出し、「父の言葉は、母への侮辱のように」腹立たしく思い、さらには、「お前はわしと同じように教師になるのが一番いいんじゃないかな」と言ったのに対して主人公が「でも、ぼくは、自分で自分の職業を選ぶ権利があると思う」と言いかえしたのに対し「馬鹿言うな。――中略――もし、お前が小説家になりたいのなら、明日からでも自分でかせいで食ってみるがいい」と叱りつけたのを思いだす。

10では翻訳した推理小説がことの他よく売れ、ボーナスとして金が入り、妻と息子を連れて街に出かけ、妻や息子に日頃欲しいと思っていた物を買い与え、当時、遊園地になっていたデパートの屋上で、アイスクリームなどを食べ、回転するコップに三人で乗ったりして楽しみ、「幸福感に似た感情がゆっくりと胸に湧いて」くる。そして心の中で「こういう生活がなぜ悪いんだと急に」考え、「なぜ今更、小説を書く必要があるんだ。俺はこうして結構やっているじゃないか。なぜこの結構な毎日を自分で恥ずかしがる必要があるんだ」と思う。とその時主人公の頭には母の死顔が浮かんできたりする。この「主人公の頭には母の死顔が浮かんできたりする」の思いは、後の部分を読まないとわからないことだが、「幸福感うんぬん」の考えに対する母を通しての痛烈な自己批判である。

（母の死顔を思い出す部分は再度結末部分でも描出される）

15では、激しく雨が降った日の午後、主人公は縁側に立ち、雨がやんで陽がさしはじめて、「濡れた樹木や隣家の屋根がまぶしく輝き、空がみるみる青く拡がり、まるで全てのものが生きかえったように息づきはじめた」のを見つめるのだが、そんな時、「急に悔恨とも自責とつかぬ感情が胸をつきあげてくるのを感じ」そして「頭のどこかでお前の生き方は嘘だという声が聞こえてくるようだった」とあり、それで主人公は妻に「もう一度、生活をやりなおさないか」と言う。ここでは、瞬間「小説を書く」という「芸術」への意欲が生じるのだが、しかし「なに言ってんのよ。いやねえ。折角、どうにか、明日のことが心配でなくなったと言うのに」「子供みたい。あなたの言うこと」と妻に一蹴されると、「彼はさっきの興奮が萎え、しぼんでいくのを感じ、あああとため息ついて」畳の上に寝転がるのである。

ここにはまだ彼の根底には芸術追求の意欲が根強く残っているものの、生活のことを優先しなければならないというコンフリクトに悩んでいるのである。

21は、なんのためかはわからないが実家に帰っていて、（父が出版社に持ち込む原稿を取りにこいとでも言ったのかもしれない）。べったらづけと父の原稿を持って帰る。ここでは、父の原稿を出版社に持ち込むことを拒否することができなかった心の弱さを反省している。帰ると、医者が来ていて、息子の稔が病気になっている。医者は入院を勧める。

主人公は入院させようと決断する。妻は入院費を心配するが、主人公は「なんとかする」と答える。主人公に生活の重荷が降りかかる。

23は、父と義母と主人公の三人が実家で月見をしている。父はたいへん機嫌がいい。

「今年は何事もなく、だれからも後指をさされず……、これが幸福というものだな」

などと言っている。主人公は「父の満足そうな横顔をみていた」。「父の浸っている安穏な幸福の背後に孤独な女が一人いたことを忘れているのだろうか。父と義母にたいするかすかな憎しみに駆られ」主人公はだんごを食べずにうつむいていると「どうした、食べないのか」と父が言い、「いつもは五つも六つも食べるくせに」と義母が言う。主人公は「仕方なく弱々しい微笑を頬に浮かべ」、そして「そんな愛想笑いをうかべた自分にたまらない嫌悪を感じ」るのである。

24 の今では、二つのシーンが描かれる。一つは帝国ホテルのロビーで母の友人のSさんと会って母のことを尋ねている。そこで、Sさんは「不運な人だったねえ。お節さんは」「お節さんは結局……――中略――たづなを、しぼりのすぎたのね」「ええ、たづなを決してゆるめることがなかった。あれじゃねぇ」と、やや非難がましく言う。それを聞いた主人公は彼女に会った帰り「烈しい怒りが胸にふきあげて」くる。父が母について何かを言うのはいい。あの父は俗人だから。伯母は母についてどう考えてもいい。あの伯母は人生について何もしらぬからだ。しかし、母の教え子の鮎川さん、母の音楽学校時代からの友人であるSさん、その人たちまで今は母を蔑(さげす)むような言い方するのは耐えられなかった。「『音楽より、もっと高いものを』と母は幾度も手紙に書いてきた。その高いものを求めた女が、彼（主人公）の母だった。その母が、世間からこういう眼でみられている。あなたちには母の生き方がわかるまい。あなたたちがわからなくても、子供の俺にはわかる」と主人公は呟きつづける。

ところが、家に帰ってきて翻訳の仕事に取りかかるがあまり進まない。夕暮れに息子の稔の看病のために病院に行っていた妻が彼女の妹に看病をかわってもらって帰ってくる。

そうして入院費用として三万円が必要だと告げる。当時の三万円は相当な額だ。先日出版社から得た三万円はすでに使い果たしている。主人公には妻が考えていることはわかっている。しかし、彼は同意できない。それで「お前の着物を売ればいいじゃないか」と言う。すると案の定、「お父さまに拝借できないかしら」と妻が言う。「いやだ」「親爺なんかには借りたくない」「お父さまに借りたくないと言って……当てがあるんですか」「だから、お前の着物を売れと言っているじゃないか」。彼は妻が泣きだすまで言いつづける。妻は泣きながら、あなたには父を軽蔑する資格なんかないわと叫ぶ。「何も知らんくせに……生意気を言うな」「言いますとも、あなたなんか、お父さまぐらいにも、なれないんじゃありませんか」主人公は彼女を撲ろうとするが撲れなかった。「彼はうつむいて母の死顔を思いうかべた、――中略――母の青白い額にはまだ苦しそうな翳が残っていた」となる。

母も自分と同じか、それ以上の苦しみを味わっていたに違いない。

このような今が過去の父や母のことを執拗に思い起こさせたのである。しかし、なぜこの今が過去を思い出させたかは、明確にはなっていない。

父は現在存命であり、交際があった。だから「今」の時間においても彼の思想はかなり明らかされている。しかし、母は、離婚や死亡によって今の時点においては主人公のまわりにはいない。したがって、今時点においてはほとんど何事も示すことはできない。多くは過去の中にしかない。それに、父のことでも過去のことでまだ明らかにしていないこともある。故に過去のことで、彼らのことで重要なところを明らかにしてみよう。

ではまず父から。彼の特性のわかるところを提示してみる。

例えば6の傍線部分「大体芸術などというもんは、まともな人間なら手をつけぬもんだ」はすでに提示した。それに加えて「お前はわしと同じように教師になるのが一番いいんじゃないかな」や、2の中で主人公が父が定年退職したと知って経済的な心配がないのか尋ねると「いや、そのほうは心配ない。前からちゃんと備えておいたから」と言う。それに昔、部屋には「備えあれば憂なし」というだれかの字がかけてあった。さらに二十年前「文学部に入ることを反対して安全な人生の道を歩むようにすすめた父」や、また10において「なあ、小説など書こうと思うなよ。ああ言うものは趣味としてやるのはいいが、職業などにしちゃあいかんぞ」「ああいう職業は危険が多い。第一、食えんようになったらどうするんだ。大体、芸術などというもんは、まともな人間なら手をつけぬもんだ」などと言っている。以上のように父はまさに生活重視の思想の持ち主であり、またこの考えは社会一般の思想でもある。

それに対して母はどうか。3において、主人公は母の若い時のことを知りたくて母の故郷を訪れ、親戚で医者をしている「達さん」を訪ねる。そこで母が家出をした話を聞く。母は女学校の時からヴァイオリンを習っていて、上野の音楽学校に入学したいと思っていたのだが、両親に反対され、「彼女はある日、突然家を出て」しまう。「勉強する旅費と当分の生活費とを作るため、姫路のある家庭で」お手伝いさんになったのである。このことから、音楽にかける情熱が凄かったことがわかる。

5では主人公が子供の頃の母の様子が描かれている。「手首と五本の指が機械のように動きつづける。絃の端から端をたえ間なく這いまわる。――中略――それも繰りかえし三時間、たった一つの旋律だけを繰りかえしている」

学校から帰った主人公は「なにかくれない」「なにか果物ない」などと言う。「本当は果物などが欲しいのではなかった。ただ彼は、眼前の母の心をこちらに向けたかったのである」そして「子供は母をゆさぶった。ヴァイオリンを弾いている間は決して話しかけたり、騒いだりしてはいけないと平生からきつく言われたのに、彼はその言いつけを忘れる不安にかられた」のだ。母は「何するの」と「怖ろしい顔で睨みつけ叱りつけた」とある。

「その話を妻にきかせた」時、妻は「とてもできないわ。あたしには」と言う。そしてさらに「なんだか、こわくなかった。あなた」と言う。「そんな時はお袋はこわかった」と主人公は頷く。「それにお袋の右腕は左腕くらべると太くてね、五本の指先はヴァイオリンの絃〟潰されて固い灰色の皮のようになっていたのを今でもはっきりと憶えている」と答える。妻は「いえ、いえ、そんなことじゃないの。子供がお腹がすいているのに、叱りつけることができるなんて、あたしにはできないわ、とても」と言う。それを聞いた主人公は「妻が母のことを非難しているのだと思って、顔を強張らせた。自分以外の者が母を批判するのは許せない。お前などにお袋のことなど理解できてたまるか。と彼はうつむいて心の中で呟いた。」

このように母は芸術に心血を注いでいる。芸術重視の思想である。芸術対生活、思想は母と父とではまったく正反対である。したがって主人公に対する期待も違ってくる。父の期待はすでに述べた。では、母の期待はどうか。それは22に描かれている。

「母さんは他のものはあなたに与えることはできなかったけれど、普通の母親たちとちがって、自分の人生をあなたに与えることができるのだとーそれを今はあなたにたいするおわびの気持と一緒に自分に言いきかせているのです。アスハルトの道は安全だから誰だっ

って歩きます。――中略――でもうしろを振りかえってみれば、その安全な道には自分の足あとなんか一つだって残っていやしない。――中略――あなたも決してアスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで下さい」

このように母と父の思想は相反関係（対構造）にある。しかもこの構造は出てくる人物をも二分する。母型人物は母と現在の自分以外にいず、父型人物は父、達さん、Sさん、教え子、妻など、多くいる。最も援助者でなければならない妻も父型にいるのは痛い。

しかし、主人公は芸術家を希求していると同時に一家の生活をも担っている。対立する両者を同時に担う立場に置かれている。どちらにも極端に傾斜することはできない。

もちろん芸術志向において主人公にとっては母は理想人物であり、欲望人物（ジラール「欲望の現象学」参照）でもある。また父は否定人物である。さらに母は「自分以外の者が母を批判するのは許せない。お前などにお袋のことなど理解できてたまるか」といい、母を絶対的肯定としてとらえている。

しかもこの肯定は単に芸術観によるだけではない。主人公の根底には母は自分をこの上なく愛してくれていたという認識がある。それが一番よく現れているのが主人公が子供の頃、重い病気を患い、入院したことをきっかけに、母が、一時、ヴァイオリンを諦めかけたことがある。しかし、母はそれが長くつづけられずに、自殺未遂事件を起こし、それをきっかけとして父母が離婚するということになる。

このことなどを含めて主人公には母に対するもう一つの思いがある。それは、子供の頃、主人公は父型の構造の方に入っていて、普通の母であることを願っていた。それが典型的に表されているところは、9の場面で、主人公が入院していて、母が、彼に付き添ってい

る時、母が指でヴァイオリンを弾くように指を動かしているのを見て、腹立ちを覚えるところがある。つまりこれは、子供の頃、母の切実な思いを知らずに、父型の方にいたことを示す。その頂点が 16 の父母の離婚に際して、どちらにつくかを迫られ、父や伯母の勧めもあって父の方についたことである。このようなことを思い出し、幼少期、自分は母を裏切ったという自責の念に囚われ、母の生き方を肯定すればするほど、その思いが強まり、今芸術への思いを捨て、生活の方へ傾くことは再び母を裏切ることになり、それはできないという思いが重くのしかかるのである。

構造的に考えるならば主人公は青年期には母型の生き方の方へと傾いていったのが、結婚して一家を構えるにしたがい母型から父型へ移行しかかっているのである。その姿勢を母を思い出すことによってブレーキをかけ、芸術に向かう心の再構築をはかろうとするのであるが、一途に芸術に打ち込みたい者にとって家族を背負うということは、どうしても両構造の板挟みに合う。

主人公が今息子が入院していてその金を工面しなければならないという切迫つまった状態に置かれ、否定している父に頭を下げて金をせびらなければならないという屈辱を味わうことになる。これとよく似た苦境を母もまた背負ったに違いない。言うなれば今主人公が母の苦しみを発見したと言ってもいい。しかもその原因の一端は自分にあったという不条理の発見を伴って。

とするならば、主人公の「真の志向性」は母の生き方の再発見を通して、自己の芸術への思いを掻き立てるとともに、父型からの攻撃や屈辱に耐えつづけなければならないという母の苦悩を共有することであり、今の自分の状態を認識をすることでもある。

そういう主人公の今が、最後の場面で典型的に表されている。

前述したように妻から「言いますとも、あなたなんか、お父さまぐらいにも、なれないんじゃありませんか」と蔑まれ、「勝呂の手が震え、思わず撲ろうとするが撲れなかった。彼はうつむいて母の死顔を思いうかべた。暗いアパートの一室、ゴムの植木鉢が片隅におかれており、母の青白い額にはまだ苦しそうな翳(かげ)が残っていた」となる。　了

注　遠藤周作の「影に対して」は『影に対して』（新潮文庫）に収録